

ヒトイヌ共生によるWell-beingの向上—身体・向社会性・社会ネットワークの強化との関連

	研究代表者	麻布大学・獣医学部・教授 菊水 健史（きくすい たけふみ）	研究者番号:90302596
	研究課題情報	課題番号：23H05472 キーワード：イヌ飼育、信頼と安心、家族関係、社会関係資本、ウェルビーイング	研究期間：2023年度～2027年度

なぜこの研究を行おうと思ったのか（研究の背景・目的）

●研究の全体像

今回の課題では、イヌのもたらすWell-beingの創発機序を生物学的に解明することを目指す。さらにその犬の効果が現代のヒト社会において、どれだけ価値をもつのかを明らかにする。

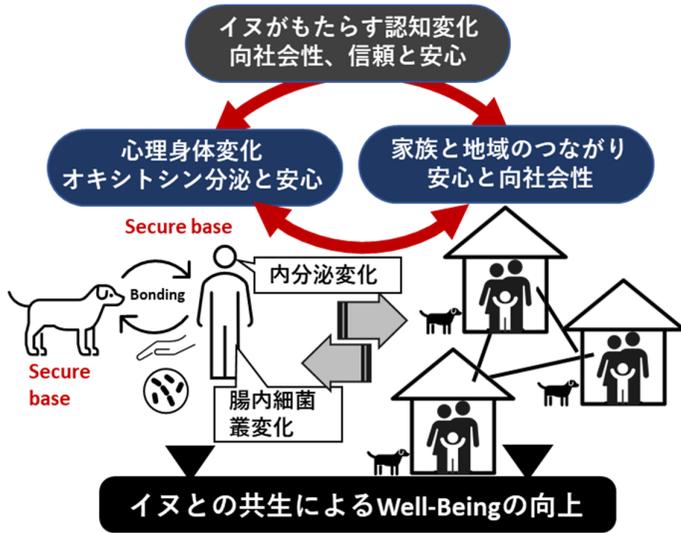


図1 本研究の概要：イヌの存在により身体・認知変化が生じ、向社会性、信頼と安心が生じる。これを起点に、飼い主にはイヌとの絆を介した身体性と社会関係を介して、家族や地域ではコミュニティの形成と強化を介して、Well-beingが向上する。

●研究の背景

- これまで私たちはアジア最大規模の思春期コホートにおいてイヌの飼育児童のWell-beingが高い値を示すこと、また社会性などのスコアが高いことを見出した。
- コホート研究に参加するイヌ飼育児童の常在菌を採取し、無菌マウスに生着させノバイオトマウスを作出、それらの社会性を評価したところ、共感性にかかわる前関心の行動が増加した。つまり、イヌ飼育児童の細菌叢には、社会性をたかめるものが含まれていることが明らかとなった。
- 並行して私たちはイヌと飼い主のやり取りによって、双方のオキシトシン神経系が活性化することを見出した。このことは、イヌの飼育がもたらす身の変化のうち、社会性などはオキシトシン神経系を介して効果を示す可能性が見出された。
- また、イヌの存在は、ある時空間の「場」においてヒトとヒトをつなぐ促進効果が知られている。例えば虐待児のカウンセリングにイヌが介在することで会話量が増え回復が早まるなど、イヌがもたらすヒト-ヒト間の信頼の醸成が指摘されてきた。

●実施内容。

研究 1

イヌの飼い主を対象に、身体的特徴として尿中オキシトシンに加え腸内菌叢を解析する。また公共財ゲームなどの社会心理評価を実施し、イヌの飼育による向社会性と身体特性の関係を統計的に明らかにする。

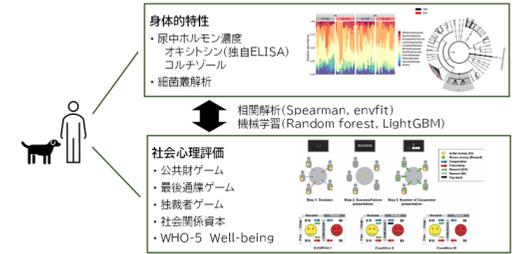


図2 研究1の概要

研究 2

思春期児童のコホートデータを用いて、イヌの飼育がもたらすWell-beingの変化、ならびにオキシトシンや細菌叢の変化を縦断的に追跡し、Well-beingと身体変化の因果モデルを作成する。

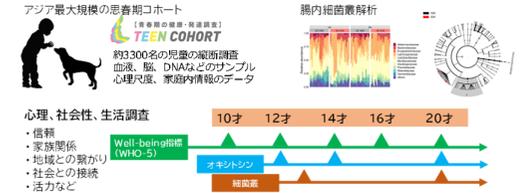


図3 研究2の概要

研究 3

実際の社会において、イヌの存在がどのような社会ネットワークに影響を与えるかに関して、社会学的調査を実施する。特に地域社会との関わり方とWell-Beingの関係を調査する。

この研究によって何をどこまで明らかにしようとしているのか

●社会への貢献

現在の日本を見ると、社会ネットワークや社会関係資本のスコアが先進国のなかでも非常に低い位置にある。今回の課題で、イヌを介した社会ネットワークの強化が明らかになれば、日本における地域コミュニティの活性化や信頼と安心の醸成Well-beingの上昇につながることが期待される。

日本の現状は？
 ・日本の15歳の「生活満足度」は、世界47カ国中41位
 ・国連による世界幸福度調査2020年度版でも、幸福度は先進国で最下位(世界63位)
 ・社会的ネットワーク、对人的な信頼感、社会参加などから算出される社会関係資本尺度も圧倒的に低い(167カ国中132位)。



図4 今回の研究による未来への貢献

●学術的な問い

イヌと共生、共進化してきたヒトの向社会性の特性を知ることであり、その特性の理解は、今を生きる我々のWell-beingの成り立ちを知ることもつながる。競争だけが進化の原動力ではない。共生という手段もヒトの進化を後押ししてきた。究極的には「ヒトはどのような社会を生きてきたか、そしてどう生きるのか」という問いに対する解の一端を探るものである。

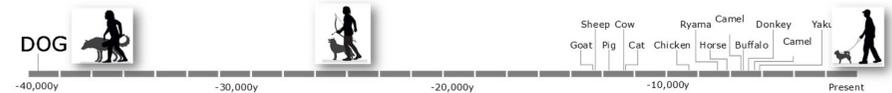


図5 ヒトとイヌの長い共生の歴史と互恵的關係